

貞丈雜記

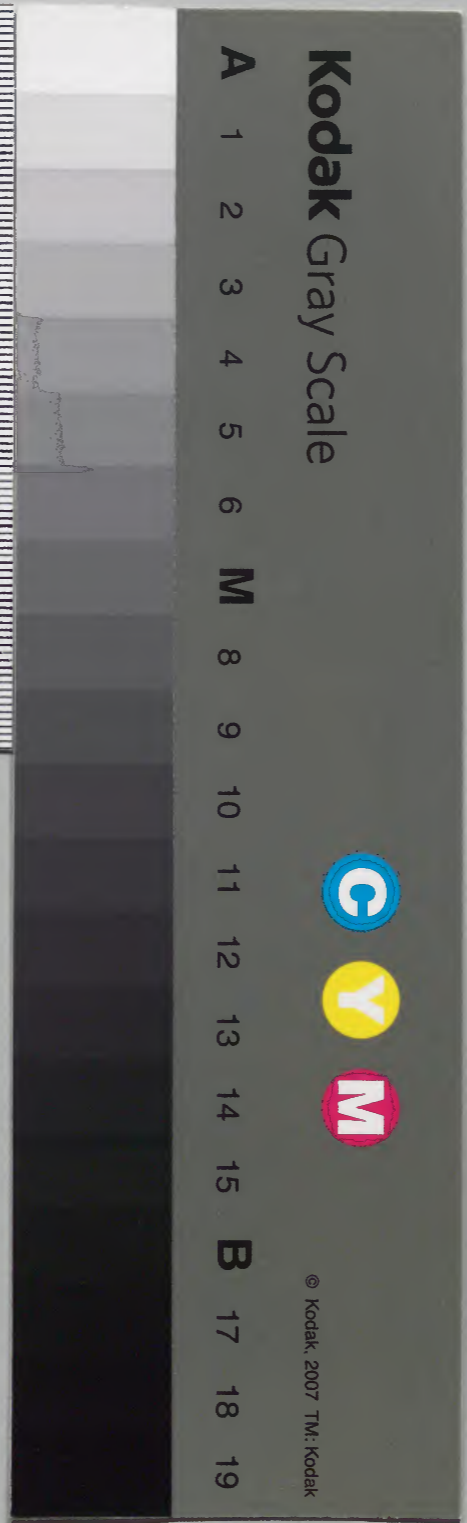
七之下

農務省  
圖書  
第一號  
共三冊

太政官文庫  
和書門  
一五八  
二六八  
三二冊

內閣文庫  
和書類  
一五八  
二六八  
三二冊

內閣文庫	
番號	和 11568
冊數	32 ( 14 )
函號	212 17





いふ事ハ近代の事也今も盃を朱ぬりしやそりすくむく  
くするハやうけをすまむびる物入京の根閣寺ハ七賢乃  
盃とて七ウ入子の盃ハ晋の七賢の名を爵繪ハ志々  
盃何れも東山殿の盃と云はれる也いざのき物形  
東山殿時代ぬり盃ハあゝ後ハ作りしもの也

一盃ハ一ツ折盃フシキよきて出す物ハ二ツ重連て出さるハ甚イとむ  
るハ故ハ軍陣の時敵テキハ大将の首取る時ハ首有り  
酒のまじる時ハ又切腹する人ハ酒のまじる時ハ盃二ツ重  
て出して二献吞フムもく考ふるハ二献を忘イムれぬハ秘ヒ今  
世とて年始ハ盃二ツ重連て出さるハいづくある

一婚禮の時夫婦盃をとりぬすハ男先吞て女はさす事古  
法也男ハ陽女ハ陰也陽ハ貴ウツトく陰ハ賤イマく陽ハ陰ハさきざら  
事天地の道理也然るハ或説ハ昔ハ男、女の家ハ別て純  
夜ハとまりて後ハ我家ハ一迎ムカハ来るされをす時女ハその家  
の亭主男ハ其家の客人ある故女先吞て男ハさす事也  
婚禮の盃ハ女より吞て男ハさす物ハ女先吞むハ酒の心見  
る心也と云は祝あやまり也用づるハあやまり陽ハ陰ハ  
先ハ事順也陰の陽ハ先ハ事ハ逆サカハ神代ハ伊弉諾尊  
伊弉册尊イザナミノミコト天の浮橋の上マて夫婦の交マツを始めハ一付  
女神伊弉册尊イサナミノミコト先祠をいけあハを女の先ざらハ宜



中をのむ人の盃を別人とて又中をのむ事ある

一 今徳利と云物を古湯スバといひる人むろくハヤまおの徳利は  
湯湯と作りたる故まどと云く

琅邪代醉卷云  
柳瘻樽也曹植

柳樽チヤギルと云物の本と作りたる手樽テダの事ハハ切の木と云く  
の木むろく平くたるひのめく作りたるを柳樽と云古の柳樽

詩ニ我有柳瘻  
樽云々柳ノ木ノコブ  
ルヲ以テ酒器造  
ルヲ西土ニテリト見  
タリ

一 又云柳一荷むと云ハ柳と作りし樽一荷を合なる柳一荷  
と云と中説軍シハ文昭目シ記云二月廿七日此方所  
能ハ五株五荷ニ荷あり時云く  
三荷百満す 法湯殿上の日記ニイナカ哉荷

と云る何と近年諸藝才賣買代物は云なきの代古酒百文別

三枚新酒百文別四枚ト云くこれらの文を以て是れハ何事也

百濟寺ハクタイジヤイナカ柳と云酒を造り出さる地名ある

雪玉集道遙院實隆公家集也は寄酒述懐と云題をよめる 此むろく交カタノ

つき天時酒川と云く一人のをむろく云く正月ハ事始

記云天野酒河内國ミカ乱事ある時ハ京都と云柳樽を進上

毎年二月七月十月ノ朝日畠山殿ヨリ鬘蛇千本白鳥一天野酒五荷  
將軍家ニ進上アリシ夏東山殿年中行事年中恒例記等ニ

見タリ河内國ハ畠山殿  
ノ領地ニテアリシナリ

一 銚子提子チウシヒサゲは蝶形を付る事ハ蝶ハのどうある日ハ出で草木  
の花の香を吸ておのの友と云はとあると云く

一祝は俤をうつる  
 蚕の蝶はあくる  
 う子を多くくむ  
 物ゆゑのこころを  
 みて子孫繁昌を  
 保ひて蚕の蝶の  
 形を桃子は付日  
 と云へば祝の物  
 礼はえてはやく  
 産むのまゝはい  
 めぐ也

人もそのごとく酒をのこして人と申さくまらびいめしむま  
 腹こもいさうひあどするはよのぬる也されは酒のむる蝶の  
 の毒を吸てあまびいめしむめくせまといふ教のあま蝶の  
 形を付りあり瓶子は蝶花形付り目し心也  
 一瓶子一對口を蝶花形包む時吐きの花の方又並ハ男蝶  
 右の方又並ハ女蝶也

一糸く関書は祝言の対ハ瓶子の口を蝶花と云ハ包まらず  
 は包むと云物ぬぬと有り是ハ瓶子授子と瓶子一對と  
 蝶形はゆめハ蝶の教申すはあま四の字を忘むあ  
 一瓶子の口外は包れもあま形包むはいさるいさる

といふは菱ハ水草また水底はまびら志ざり印のこまめく  
 つよき物とびら志ざりあまつよきを祝は用る酒も  
 水取の物あるは菱の花形また口を包む也

一瓶子授子は祝の時松山たち花山たちをいを蝶花形と云  
 て付りあり松はいろ色うとま子年を種物と山たち志  
 ハ冬はあても雪霜といふまが実も赤く熟シテき物と云  
 二品ともよめとま物ある故祝は用る也

一瓶子の柄を包むるはあま事之京都將軍教中また以用  
 何れハ瓶子ハ柄を包まると大草流式之膳部記京都將  
 庖丁人大草三郎 瓶子の柄をつまはる為流ハあくはとあり  
 左エ門尉云以ノ記

東鑑卷世酒杯  
片口鉈子置折敷  
上鉈子覆蓋

古今著聞集卷十四  
云白河院深雪ノ朝  
雪見ニ御幸アルト  
テ中畧 朽葉ノカサミ  
著允童ニ入ヒトリハ  
沉ノ折敷ニ玉ノ盃銀  
血ニ金ノ摘一フサヲ  
モラレタルヲ持ツリケリ  
一入ハ片口ノテウシニサ  
ケラテ持ツリ云々右片

口ノラウシト云ニ付テ  
モロク子ノテウシモ古  
ヨリ有シラ考ベシ  
海人藻芥云山名修  
理大夫入道 紀州佐別  
西国守護  
一比仁和寺ニ居住之  
間年始ニ罷向彼宿  
所之处三献ノ義アリ  
毎度各鐘也鉈子片  
口ヲ畏多リ 此事高  
尾張入道以正難之  
云鉈子ノ畏事ハ全  
分略儀也彼禪門家  
中ニ不足ナリ云々於以  
正難不肖身片口鉈  
子以下祝儀式ノ具  
足ハ武州師直ガ代司  
京中ノ職人給之間如  
形不足ナシト云々

莫板持系記云陸鉈子の柄包ハ殿中ハハ世ノ世あり云々  
されバ柄を包む法式ハあきる也又鉈子をバ一為ニ枝と  
云也旧記見スルあり

一 両口の鉈子ハ畧儀ノ古殿中ニハ片口を用ヰル一魚板持  
系記云此後ノ時ハ片口ニテ一式膳部記云公方極ハ成を  
ニ外ニテ一々時ハ片口ニテ系ハ百口をも包むるあり云々  
自然ノ口あき時ニテ口ニテハ口の包括ヲ他流ハ木  
ノ葉をゆハ好む云々之ノ事ハ一向あきる云々  
云云式三献為ノ此盃の時ハ鉈子ハ口可成ノ公方極ニハ  
正月五月ニ外テ朝ハハ口ノ此鉈子白シ 白ハ白めりき宗  
立一冊校書アリ

此酒も白酒也又私持て片口にてしおけぬハ口の口を包む  
也出陣の時も外祝言もハ口の鉈子を可用云々今ノ世  
片口の鉈子絶て皆ハ口斗あり一説ニテ右ハ切腹  
の人ハ酒の飲む時ハ口より酒を出さず常ハ包おくと云  
ハ何やまうハ切腹人の用意ハ口をニテ付ておくハ  
あらずハ口にてしハ大酒をりハ客人入ニテ付て吞  
耐右の人ハ左の人ハ酒を盃ハ入登きハ両方ハ口を付  
多ク切腹の用意ハ切腹人ハ酒の飲む時ハ口を  
左ノことハ口より酒を出さず鉈子の持括ハ口にてハ  
右の手を取って持て送す也右より酒出さず右口を

用ハ乱酒の時斗あり

一 此の酒と云ハ今其の筒ツクの酒と云ハ同一又さく元と云ハ  
の葉をさくとも云ハよりて升筒は酒を入る故さく元と云ハあり

一 今村蓬菜ホウライの酒基と云スハマ洲濱の基三の山を作り松竹霍急  
あどを作りまふ有をわき思その昔より到るこれち

風流のるそ親式シヤクのるそあさすきと酒高の興は出まへ  
又花をあど作り物して盃をおく盃基も其今乃世のごとく


祝儀ハ必蓬菜を用と云はハか 東鑑卷四十九正元二年四月三日  
庚子晴宗尊親王也入御于入道陸奥守亭ミヤストコロ御息所中畧後


方進風流造蓬菜云く又鎌田草子云君の是追の山下向を一期

乃免んがくうんげとんご蓬菜蓬菜をわらう棚組をわらうみ君をい  
ヤヤんごあわううの志下組み魚を志鹿のとり入奉鹿符まといハ

五人の子どもをバミ三河のこの國あまけの山鹿符あつりまこいぬ  
又うら内海のおきまお不あをわらうしと云

一 今世為基と云物昔も有古ハ嶋形と云蓬菜も酒形の因之

洲濱形  ぬ此の基の板を作り海中の酒のまをい海さく物

瓶古の園のみくあるを洲濱と云これ酒形も洲濱くとも云  
其上は有を盛るく  ぬ此の基の板を作り海中の酒のまをい海さく物

四天龍寺供養ノ条云御前風流の酒形を居これより大井川の景趣  
を表して水紅錦を洗ひて感眞の心を添さうけり貞丈按  
洲濱乃

永享室町殿行幸  
記云志満所盃基  
とあり則嶋蓋ラ菴



又選法云竹葉酒也云

本草綱目竹葉酒治諸風熱病清心腸意淡竹葉煎汁如常釀酒飲云

蓋ハ有を盛のふあふ古禁中より草合花合根合かと云て色くの相を合せ飲をよみて興せしめり其合せ相をハ多くハ洲漢の蓋を修してそれのせて出されり多榮花相語古今著聞集其外古き相傳ふんくう事一長き右器之

酒をさくともくこんとも云ハさくハ三く也くこんハ九献之酒ハ

三三九度吞むを祝ひとする故九陽数とめべき歟

唐土も九献と云るあり左傳信公十二年の事云楚子入享于鄭九献と何りもの註云用上公之禮九献酒禮畢云

一 正通<sup>トウ</sup>と云るめり出と云ふはあはれ貴人の以前各り出され

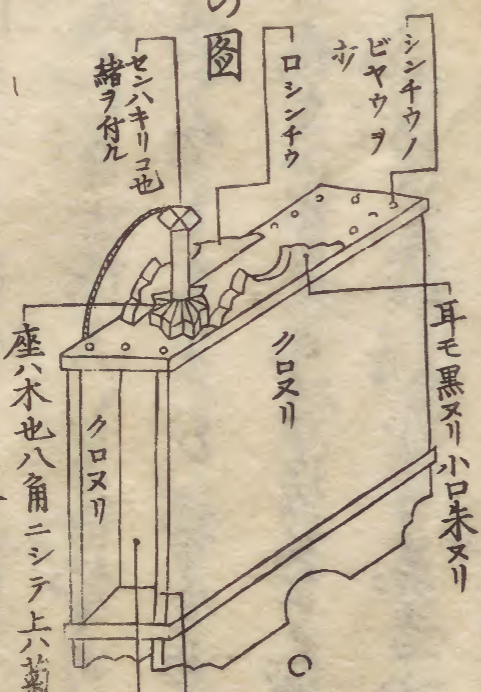
法酒臨するより一腔の去人の以前めり出さる時正通と云常

又ハめり出ると云ふは元格記に云たり酌仕扱吞格器

一 さく樽のり尺素往來<sup>セキツ</sup>の時代<sup>系於格器</sup>の去<sup>レイシキサンダレ</sup>例式指楯一個傳捍西三

とありさくたるハ箱をさく樽はまるとゆひるとハ常の柱<sup>カツラ</sup>を入て<sup>くづを入るとハ</sup>ゆひるを云くさく樽はもはや南世をさぬ相おれは後ハ何ともあはれ<sup>ぬ</sup>儀<sup>を</sup>繪<sup>を</sup>記<sup>を</sup>

指樽の圖



右のさく樽大なるも小きもあり今ハ世は深山ハあ

一 今時蓋<sup>ウチ</sup>の用もつとけり内<sup>ウチ</sup>ぐりとしてお器の内をあくニテ

星の柄もやまきこるお器あり内ぐりとして名ハ旧記に見及ぶ



名也ナすくく〜と云河、素をわく〜と云似あ、ゆ人嬉礼を  
の時トキハ喜ヨシむ詞也

一 舊記ハ殿中ハ一献又ハ一献の時トキをいへハ酒宴シユエンの時と云るハ  
そが一度酒をまむむ御ミコトハ何ナニハ一献二献と云  
とハ別あり

一 勸ケル盃ハと云ハ人ハ酒をのまざる事也勸ケル盃ハと云るはさつづきをま  
むむむ也勸ケルの字ハクハシと云ケシと云むハ古よりケハシと云  
あ〜ハ〜〜〜クハシハシと云ハ云ハぬ

一 白酒と云事 奈々関書ハ公方様と云ハ正月五日外前朔  
ハ六片ハの由純子白ハ酒也白酒也とあり白酒とハ今も有白酒ハ  
濃ノコハ者モノベシ 飯米イハヒと云作シ之ヲ 飯米ハ酒の素を  
うすく〜〜 禁裏キムリと云御代

誓チカりの初ハジメハ大嘗會オホノシメノケと云此神事ミコトノコトハ其初ハジメハ神カミハ白酒シロキ  
黒酒クロキと云二品の神酒ミコトノメを奉ホウる 陰カゲハ白酒ハ常トコのす〜酒メ〜  
右白酒ハ是の事コトと云遠トホ也黒酒ハ常山トコヤマの根ネを黒クロ焼ヤキ〜  
〜と酒メハ中ナカ古コ黒胡麻クロコウマの粉コを用ヨウ〜  
〜も何ナニ〜〜と也是ハ非也とぞ

一 盃ハシをうウ〜グセと云く〜ハい〜〜御ミコト〜軍陳イクサノチの時トキ敵テキの大  
將侍シヤウジ大始オホノシメの首カビをえ〜時トキ突ツク検ケン終ハジメ〜その首カビ酒メを飲ノムす  
るハ土器ツツニツ出デ〜と逆手サカテ砂シ〜酒メを〜〜け〜入イての〜分ウケ〜  
〜〜首カビの希スガシ酒メを〜〜て〜の〜〜け〜〜二ニ盃ハシを  
〜〜けを〜〜手テ〜〜はグけて置オケ〜依ヨ之ノ為タメ〜ハ盃ハシを〜〜〜



さうぬ本ありぬいふは花の木のあはれとていふは又上り削り  
 花の池橋の記あり  
 一 東鑑卷三十は鉦子覆蓋とありてあり蓋を覆ふは  
 鉦子ハハぬとていふは折おちどの敷をかくして  
 覆ひおきたるを云ふべし  
 一 鉦子ハハぬとていふは犬追物の時酒のむろを云ふは嵯川  
 新志の尉親元の日記は文明十三年七月二日貴殿浦  
 上へ出胡犬何り中畧書以後こぐりては酒を  
 とあり犬追物ありげは馬場一盃鉦子有持出りて鉦子馬  
 上へ酒のむろ犬追物の書ありあり酒を酒力を潤こぐり  
 をかくしむるはありて

大鼓樽の形は舞楽  
 の大鼓乃形して上の  
 宝貨は不をローた  
 るハハ常の如し此  
 圓柄は長きとて  
 信を物とする

一 三間の御所ウツマの糸の池一献と云ふ旧記も是れ主敵のあり  
 活既三宵ありしと聞ゆ則主敵もこの池一献あり庭上へ居  
 給既クニの前はその事ハあり  
 一 大鼓樽タイコザルと云物むろもありし物と急キトなる物と  
 ハあり進物もせむるは古用集永正天文のは記云大鼓樽はあり  
 一 唐鉦子之事鎌倉年中行事云正月朔日酒座は二重は  
 唐鉦子カラハイジ同鉦子ウツマ有るは唐鉦子とハぬとていふは  
 鉦子あり又ハ木を作る是れありし物ありし物ありし  
 らハ唐めきたるは唐鉦子と云ふは外子細あり

太平記三云主上  
笠置市没落の  
条二儀の百もを  
あぶらのあしど  
はあふりりれバ  
そりこりのあや  
しげあるはたす  
けのせまひうせ  
て云く

輿類之部

一輿コシは四品あり一は板イタ二は網代アジロ三はそりおし四はぬり  
 ぐり是之板イタ一は段親式を以て用之に次を以て用之  
 網代アジロ一は張ハリ二はぬりアジロ三は畧儀也アジロ用アジロ也  
 板イタ一は時トキは供イタ白イタ垂イタ又イタハ單ヒト垂イタ大帷オホカドミを垂イタて  
 着イタて網代アジロ一はそりイタ二はぬりアジロ三は時トキは供イタ白イタ垂イタ又イタハ單ヒト垂イタ大帷オホカドミを垂イタて  
 の時トキは供イタ考イタのまあイタ三は貞衡イタ祝イタ  
 一板イタ一は名ナハ本イタ一は又棟立ムネタテ又棟上ムネアゲとも又四方シハラ一はとも云  
 鎌倉年中行事イタ云正月イタ五イタの夜イタは始イタ管領イタ出恒イタ









あんこのるあを  
ごとも云太平記  
卷十三云四郎入  
道を掃く東せ  
て血の付く帷  
を上ニ引覆ひ  
あり

糞ノ字ヲタテ  
ヨム也

所免を受くる人ハ輿ヲ乗ふこゝハ免をき人ハ騎馬あり

出家者ども輿はれぬ馬は乗る人ある人乃云今の駕  
籠あがハ中古旅人ををのせ又合戦の相手員をのせる為ナ

作り出する物と古老の物語又云今の駕籠乗物あが云

物ハあんごと云物を後ハ結構作りあたる異本曾我

物語河津最後の条はさて有べきはあがれハ俄に何んだと

云物むあが尻をかきのせて宿所ハあがりたれ云ハ何ん

ごと云物ハ旅人を乗る駕籠也山駕籠と云物ハあん

あつとも云ハ和名抄ニ云復輿 和名 アミイタ と有り是れ何んを乃

字あるべし アミをアンとソハイの字を略してアミダと云るべし

籠乃輿と云物何ハ太平記ハ 才三ノ巻 主上笠置 云日頃の

行幸ハ車ハかりて風輦ハ天子のハ 数万の武士ハあがこすれ

月郷雲客ハ何やげある籠の輿侍馬ハたまげのせられて七条

を乗ハ河系をのりハ六波羅といふを給まは籠の輿と

云物ハ今の駕籠乗物の類あるべき也

乗物と云輿車の熱名也源平盛衰記世ハの巻 友時森重衛 中将

悦ハ友討して乗物出でて内裏ハ甚ス女房世もはくす

思百けどもせめて志は終りハ車はめハ出給ひたる云

車を乗物といひ云也

一車ハ後より乗りて 前より ちかみりてハ

源氏物語ハゆげ  
ん不ちの乗物  
とあり普賢菩薩  
の乗物ハ白象あり  
これらものゆげ  
馬ものもあがり

盛衰記世三木曾  
院系ノ条ニ見

輿ハ前より後へとあり下あり

一 きのろぶし黄と輿也是も前云塗ありと黄多の漆

ぬりあるし嫁入記云あどろごご一色又よあむひの

時をりへ常の町きいろのあり云黄と輿も塗輿あり

一 漆一とそと輿をのすも基のりへ嫁迎記は繪圖何山

式部少輔亭御成記  
は漆一とそと何

一 ホー巻といふの長柄をまおくおくまか板のごとくして

四足あり奉名をば志ぢと云也榻の字也車は百々耐用之



榻如此物也

車の志ぢハ金物もあり  
あけまきををりあり

一 ちよくまんハぬりごごのりへ年中徳大名は成記はちよく

まんとして巻のぬりごご一色は糸内もまろくちよくまん

ハ直輦と書あるべし  
走元故実ハ直輦と  
アリ簾の字ハ並ナルヘシ

一 檳榔毛車とハ車の座ねの上を檳榔といふ木の葉をとおひ

飾りたる車也檳榔の葉ハ大くして檳榔の葉のや一檳榔

の葉無耐ハ管の葉を代りは用るへは檳榔毛の車は時車の

道具も定り何り一条扱政兼良公は作の柗為葉葉は云檳

榔毛赤色の簾錦スハラスコシタスレウゲノクミアルキハル

青簾草 アラスコシタスレウケノカモノシキ サイゲクキ  
緑 青末濃下簾金銅金物榻云西宮記云檳榔毛ハ太上

皇以下四位以上通用云真文云檳榔毛ノ字ハカザル車也鑑ノ

雑記七

世三終



